

第 51 回日本ばら切花品評会審査講評

審査長 土井元章（信州大学農学部）

1. 審査経過

日本ばら切花協会（杉本重幸会長）主催の第 51 回日本ばら切花品評会は、昨年に引き続いて高島屋大阪店 7 階催事場を会場として、平成 20 年 4 月 1 日から 4 月 3 日までの 3 日間（4 月 1 日は準備）開催された。例年より 2 週間以上早い時期の開催であったため、出展数が揃うかが心配されたが、前年の 481 点よりは減ったものの、434 点の出品があった。これらは、全国 42 道府県の会員のうち平暖地を中心として 24 道府県 255 名の会員からのものである。北海道や山形といった冬の厳しい地域の会員からの出品もあり、生産者の意気込みが感じられた。4 月 1 日午後より切花の受付・搬入を行い、水あげ後会場内に展示していった。翌 2 日 10 時から一般公開し、3 日午後より出展作品の販売が行われた。

品目別内訳は、スプレー 92 点、スタンダード 342 点で、スタンダードの色別内訳は、赤 63 点、ピンク系 150 点、黄・オレンジ系 54 点、白・クリーム系 40 点、覆色 9 点、その他 26 点である。‘ローテローゼ’の 18 点、‘スイートアバランチエ’の 11 点と、同一品種で 10 点以上の出品があったのは 2 品種しかなく、5 点以上の出品は 12 品種であった。スタンダードでは大輪系の品種が増加し、かつての主力品種である‘ティネケ’や‘ノブレス’の出品数が激減している。

品評会の審査は一般公開に先立ち 4 月 2 日 8 時から 10 時までの 2 時間をかけて行い、11 名の審査員により各賞を選考した。奈良県、三重県、滋賀県の普及所や行政関係者の審査補助により、記録や選考された切花の移動、賞の表示等のお手伝いをいただき、時間内に審査を終えることができた。審査員は、審査長の土井元章（信州大学農学部）、副審査長の小山裕三（奈良県農業総合センター）をはじめ、試験研究・普及機関から 4 名、花き卸売市場から 3 名、小売商組合等から 3 名、フラワーデザイナー協会から 1 名の代表で構成されている。

前年までは審査員を 3 グループに分け、1/3 ずつを受けもって優良賞の選考を行っていたが、本年度は全審査員が全体を把握できるようにして分担審査は行わなかった。この点を含め、審査前に審査長の土井より審査に関する説明を審査規定に則って行った。特に、本品評会は生産者の品評会であることから、品種の特性に関する育種的な評価は行わないことを申し合わせた。一方、ペントネックや萎れ等の輸送に起因する障害については、生産者の技術的な問題であるので、病害虫の付着を含めて十分に評価してもらうこととした。スプレー、スタンダード白・クリーム系+黄・オレンジ系、スタンダード赤、スタンダードピンク系、スタンダード覆輪+その他の 5 グループに分け、この順に出品数に応じて約 25% を優良賞候補として選出し、引き続いて約 8% を優秀賞（特別賞）候補として選出した。全体のあら選びを終えた上で、優秀賞候補 34 点を 1 箇所を集め、全審査員により特に優れているものを数点選び出し、そこから農林水産大臣賞、生産局長賞、近畿農政局長賞の擬賞を行った。さらに 26 点の優秀賞を順番に擬賞し、結果残された 5 点は優良賞に戻した。優良賞候補については、再度問題点がないかどうかをチェックした上で数点を戻し、75 点（優

秀賞を含め104点)を擬賞した。

選考にあたっては、出品基準が守られているかどうかを確認した上で、葉と花の色やバランスが良好で、十分に水があがっていること、病害虫がない、いたみや花卉のシミがないといった高い栽培・流通技術によって出品された商品価値の高い切花であることは勿論のこと、消費に適合する条件を具備していることを重要視して選考した。例年になく、今回の出展のなかには水あげが不良で部分的にベントネックが発生しているものが目についた。また、水があがらずに展示を断念したものもあったとのことである。原因は不明であるが、ハウスを閉めきって換気が悪い環境下で栽培されてきたものがあったと思われる。また、近年のバケツ低温流通の普及に伴い、乾式での宅急便輸送に慣れない生産者もいたのではないだろうか。もう一つ気になった点は、窒素過多で葉が大きく緑色が濃すぎ、花とのバランスが悪いものがかなりあったことである。品評会の時期が早まったことがどの程度影響したのかは明らかではないが、前年度と2週間のちがいでこのような問題が出ることを考えると、栽培環境を的確に把握していかに管理や出荷技術を調整するかが生産者に求められていることになる。

優良賞・優秀賞の選考とは別に、展示会場を訪れた消費者329人に投票を行ってもらい、お客様奨励賞27点を選出しているが、優秀賞との合致は13点である。お客様奨励賞の得票1位は、関西生花市場協同組合理事長賞を受賞した‘アトリスweet’(静岡県：栗田宏昭氏出品)で、優秀賞の選考では品種の特性として葉が貧弱であるとの指摘がなされていたが、それを上回る魅力的な桜色のスプレー咲きが来訪者の目を引いたものと思われる。お客様奨励賞で高い得票を得て優秀賞に選ばれなかったのは、‘スープレス’(群馬県：中村恵寿氏出品)、『センセーション’(静岡県：伴野精男氏出品)、『ピンクインテューション’(静岡県：上西道夫氏出品)であった。

2. 審査講評

今回農林水産大臣賞には、審査員全員の合意のもと、ピンクの大輪スタンダードである‘スイートアバランチ’(和歌山県・山本修巧氏出品)を擬賞した。優良賞の選考時点から審査員の目を引いており、同氏の‘アバランチ’ともども最終選考に残った。花の大きさやボリュームは申し分なく、葉と花のバランス、揃いもよくすばらしい仕上がりで、氏の栽培技術の高さがうかがえた。大輪系の品種がスタンダードの主流になっていく兆しを感じさせる出来映えであった。生産局長賞にはオレンジのスタンダード‘ラ・カンパネラ’(滋賀県・杉本重幸氏出品)を、近畿農政局長賞には赤のスタンダード‘オスカーシャイン’(福岡県・角直記氏出品)を擬賞した。前者は麒麟・アグリバイオ(株)の品種で、2006-2007年のJFSフラワー・オブ・ザ・イヤーを受賞しているカーネーション咲きの新しい品種で、今回3点が出品されていた。受賞花はそのなかで最もボリュームやバランスが優れていたものである。また、選考にあたっては小売商の審査員からの強い推薦を受けた。ただし、生産性が極端に悪いとのことで、今後どの程度普及していくかを見守りたいところである。後者は、今井清氏作出の品種で数年前から出品数が増加しており、今回も4点が出品されていた。‘カンツォーネ’とともに‘ローテローゼ’の後継品種として期待されている品種である。赤の品種は温度不足のため花卉が黒ずんでいるものがかなりあったが、受賞花は花卉の発色がよく、花が大きく、葉と花のバランスも優れていた。この品種は、夏季の花卉の退色も少ないが、生産性がやや劣るとのことである。奈良県知事賞にはピンクのスプレーである‘フェアリーテール’(奈良県：東伸幸氏出品)、奈良県議

会議長賞には覆色スタンダードの‘チェリープランディー’(奈良県：中筋里美氏出品),以下24点を優秀賞の各賞に擬賞した。

3. 審査員の意見

審査終了後、審査員全員で審査講評を行い、その中で以下のような意見が出された。

全体として、品種が益々多様化していることがうかがえた。オールドローズ系の出品は前年度と同様少なかったが、‘Mia 愛子’のような新しい品種の出品もあり、一方で優秀賞を受賞した‘ブラックティ’や‘オールドダッチ’のような古く個性的な品種を作りこなし出品するといった多様化に対応した生産者の苦心が感じられた。大型の施設で多品種を栽培することが一般的になりつつあり、環境管理の難しさに加え、1品種の栽培面積が減少していることは、出品の揃いにも反映されており、10本中1～2本切り前が揃っていなかったり、品質が劣っていたりするものがあった。また、同一品種においても、ここまで差が出るかと思われるほど生産者による違いが大きく、地域的な気候の差もさることながら、低温・低日射期の栽培管理の違いが大きく影響したものと思われた。病害虫の発生や薬斑の付着は前年度よりも少なかった。また、一部スプレー品種で摘蕾が不完全で花梗が残っているものがあるとの指摘を受けた。

複数の審査員から、今回ベントネックの発生が数多く見られたこと、花卉のいたみやしみが多かったことの指摘を受けた。収穫後の水あげや輸送にも問題があったと思われるが、栽培環境を適切に管理することが発生防止の大前提となる。ここ数年重油高騰を受けて、バラの生産施設へのヒートポンプの導入が進んでおり、暖房機能だけでなく除湿機能をうまく活用して品質向上に向けた工夫を促したい。

卸売市場や小売商の審査員からは、切り前についての指摘があった。品評会ということで全体にはゆるめの切り前になっており、かたい切り前の出品には審査が不利になる。この点についてガイドラインを定めて出品者に指示する方がよいのではという意見が出された。また、‘サフィア’や‘ノブレス’といった主力品種が少ないのは寂しとの意見が昨年に引き続いて出された。ただし、出展されていたこれらの品種の出来映えはよく、赤の品種のみならず、ピンクや白においても次世代の主力品種の定着が望まれるところである。大輪系の出品が増えているが、それが売れ筋とは必ずしも一致していないし、実際の生産比率を的確に反映しているものではない。また、小売商の審査員からは、ハイブリッドティーを大量に使うことは難しく、もっとフィロリバンダ系の品種の導入に力を入れてほしいとの指摘があった。また、かわいらしいものがないのではないかと意見もあった。

展示については、段の位置によってまたライティングによって印象がかなり異なるため、工夫が望まれるとの意見が出された。会場スペースの関係から改善は難しいと思われるが、審査には影響が出ないよう今後十分に配慮したい。また、束ね方やいけ方によっても印象が異なるため、会場にいる出展者が有利にならないようこの点についても配慮が必要であろう。

変わり咲きの‘ラ・カンパネラ’を話題として、日持ちもよくバラのイメージを広げる意味でも是非とも売っていきたいとする小売商と杉本会長との間で意見交換が行われた。生産者としては、重油価格の高騰を受けて、生産性の悪い品種は切り捨てざるを得なくなっているのが現状であるとの意見が会長から披露された。確実に収益をあげうる主力品種の作付けが減少している昨今、どこまで収益性を犠牲にして多様性を求めるかは生産者の判断であり、一方で小売商の理解が必要な部分であると感じた。小売店には生産者の

バラへのこだわりをきちんと消費者へ伝え、日本のバラを売る努力が求められる。この点に関して小売店はあまりに不勉強である。今以上に生産者と小売店や消費者との情報交換が必要であり、本品評会はそのための絶好の場である。お客様奨励賞と優秀賞がなぜこれだけ違ってくるのか、今一度我々は考えてみる必要がある。国内産のバラのよさは何か、またどのような主張をバラに添えて消費者に届けるのか、生産者のみならず卸売市場や小売店の連携が不可欠な時である。

今回の一括審査とする方法については、おおむね問題点はなく、時間内に審査を終えることができた。ただし、特別賞の各賞における性格づけが曖昧であるため、その賞を与えることの理由が求めづらいとの指摘があり、今後いくつかの賞については性格付けを行ってはどうかとの意見があった。

4. 審査結果

厳正な審査の結果、優秀賞（特別賞）29点、優良賞75点を選出し疑賞しましたので、これらに基づいて表彰されますようお願いして審査報告といたします。